

仁木 一枝氏、厚生労働省の松永 久氏からそれぞれの報告の後、前述の平田 智子氏が加わり意見交換が行われました。

最初の報告者である椎木氏の所属するハートコープひろしまは生協ひろしまの特例子会社で、障がいのある方が農産品の検品や容器のリサイクル処理に従事しています。

経験を積むことで一見では分からない不良品を見分けられ、リサイクル処理のスピードも速いそうです。

ハートコープの良い結果を受けて、就労継続支援A型事業を行う農業生産法人ハートランドひろしまを設立し現在16名が雇用され、生協の特例子会社の流れは全国に広がりつつあるそうです。

2番目の報告者である仁木氏は島根県江津市で障がいのある子どもに、『ふれジョブ』活動をされています。

『ふれジョブ』とは、障がいのある小学校5年生から高校3年生までの子どもが1週間に1時間仕事を体験してもらうもので、地域が子どもにとって身近なものになるよう進めておられます。

ふれジョブの送り迎えはジョブサポーターと呼ばれる福祉や教育の専門家ではない地域のボランティアが行っており、地域で育むことに重点を置いて実践されています。

最後の報告者である松永氏は、厚生労働省 職業安定局 障害者雇用対策課 調査官で障がい者雇用の現状の報告がありました。平成25年度の就職件数は77,883件と4年連続で過去最高を更新していて、法定雇用率の上昇もあり企業が取り組んでいる結果とのこと。

加えて初めて精神障がい者の就職件数が障がいの中で最も多くなったそうです。

また、国としての施策を幾つか紹介されました。『チーム支援』はハローワーク職員だけでなく、福祉施設職員やその他の就労支援者がチームとして障がい者の就労を支援するもので平成18年から実施されています。

『ジョブコーチ(職場適応援助者)による支援』は平成25年度では職場定着率が約9割と、活用しない場合の約5割と比して高く、力を入れているそうです。

三者の報告の後、田中氏より「なぜ働くのか」と問われ、各々より収入を得るためだけでなく社会参加ややりがい・充実感のためと答えられていました。

「障がい者の雇用が進まないのはなぜか」の問いに対しては「事業所側が障がい者を知らない」ことを挙げられ、椎木氏は障がい者を雇用したことで理解が深まり、今ではなくてはならない存在だと言っておられました。



分科会を終えて、障がい者の雇用は発展途上でまだまだ課題があります。障がい者が働きやすい環境を作っていくことは重要ですが働くためには働く場が不可欠であり、企業の支援も必要だと感じました。

障がいがあっても働きたいという思いを尊重し、百人百様の働き方ができる社会が望まれます。

【本人大会】に参加して
ぼると 主任 黒岩 剛史
メープル 平井 久美

平成26年9月27、28日に開催された全国大会には、昨年結成された当事者の会の「きずな会支部」から、本人大会に利用者9名と職員2名が参加しました。

本人大会の話し合いの部門には、きずな会の佐々木会長と中元副会長と黒岩の3名で第3分科会の「本人活動」に参加しました。

午前中は話し合いの部門の全体会で韓国発達障害者協会の方々の発表でした。韓国の発達障がいの当事者がわかりやすい権利条約を制作したり、TV番組の字幕や放送の仕方を発達障害者向けに分かりやすくする活動を、韓国のTV局7社に働き掛けてその番組が放映されている活動の報告がありました。

昼からの分科会では、佐々木会長と中元副会長が「きずな会」のような本人活動をどうやって運営したらいいのか、どうしたら長く続けられるのかといった疑問点を他府県で本人活動を実際されている方に積極的に話しかけ交流を深めていました。佐々木会長からも「いろいろ出来ることを増やしたいなあ」「みんな名刺を持ってるから、うちも作ったほ